

〈書評〉井上厚史監修・島根県立大学総合政策学部井上厚史研究室ゼミ学生制作『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』（山陰中央新報社、二〇一一年）

井手，麻衣子
九州大学大学院：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1440775>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．29，pp.103-106，2014-03-17．九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



【書評】

井上厚史監修・島根県立大学総合政策学部井上厚史研究室ゼミ学生制作 『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』

(山陰中央新報社、二〇一一年)

井 手 麻衣子

平成二十五(二〇一三)年九月、政府は平成二十七年の世界遺産への登録を目指し、九州・山口地区を中心とする日本近代化遺産群「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」を推薦すると正式に発表された。当物件は、北九州市の八幡製鉄所や長崎市の長崎造船所・端島炭鉱(軍艦島)、大牟田市及び荒尾市の三池炭鉱など二十八の資産で構成されるもので、平成二十一年に世界遺産の国内暫定リスト入りを果たしていた。世界遺産には自然遺産と文化遺産があり、国内で与えられる推薦枠は年に一件ずつである。当物件はその文化遺産の一枚を見事勝ち取ったことになる。

今回取り上げる書は、日本近代化遺産群に先駆けて世界遺産に登録された石見銀山関連史跡及び周辺地域のガイドブックである。

石見銀山は現島根県大田市おおだに位置する旧銀鉱山である。大永六(一五二六)年、博多の豪商神屋寿禎かみやじゅていは、石見国守護大内氏の庇護のもと銀山開発に着手したという。寿禎は灰吹法という優れた製錬・精錬技術を導

入し、銀の採掘量及び生産量の増大を持たらした。同じ頃、中国の基軸通貨が銅銭から銀へと移行したため、海外における銀の需要は急速に高まった。そのため、石見銀を含む日本産の銀は海外交易の輸出品として重要な位置付けとなり、大量の日本銀が海外へ流出した。その量は世界の産銀の三分の一から二分の一を占めるほどであった。⁽¹⁾このような経過の中で、石見銀山をとりまく環境は次第に整備されていった。

平成十九年、石見銀山とその関連史跡は「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録された。その登録名が表すように、採掘から精錬まで行われた鉱山跡やその周辺の町だけではなく、防御施設であった石見城などの城跡や積み出しに使用された港湾、銀の搬出や銀の産出に伴う諸物資の搬入に使われた銀山街道なども含まれている。これは、世界遺産への登録を行う上で、銀の生産から搬出に至る鉱山運営の全体像を示すことに重点が置かれたためである。また、製錬・精錬には膨大な木材燃料が不可欠であったため、石見銀山の周辺の森林はその生

産資源として管理されていた。そのため、現在まで豊かな山林を保存するに至っており、鉱山のみならず周囲の史跡と自然環境を一体として捉え保存していくことが、その歴史を伝えていく上で重要であるという認識に基づいた登録であった。

平成十三年の暫定リストへの記載を契機に、石見銀山への世間の注目は高まっていたが、平成十九年の世界遺産への登録以降益々勢いを増した。その反響は石見銀山関連書籍の刊行においても明らかであった。書籍の種類は、ガイドブック（旅行誌）、一般雑誌の特集号、歴史小説、自然史・歴史系の研究書、関係自治体による調査報告書・史料集など多種多様である。その中でもガイドブックの占める割合は大きく、観光客数の急増を見越した出版であることは明白である。勿論、このような動向は、国内の他の世界遺産の事例においても同様に見られるもので、平成二十五年に登録された富士山への登山ブームは記憶に新しい。

しかしながら、本書が銀山街道に着目した目的は、世界遺産登録を機に増加する観光客をターゲットとした利潤の獲得ではない。それは、本書の内容が世界遺産の紹介に留まっていなかったことからも明らかである。本書を制作したゼミでは過疎高齢化などの地域問題の解決をその主要課題とし、フィールドワークを通じた学習活動を行っている。学生が実際に地域社会へ分け入ることにより、現代社会で発生する諸課題の解決策を立案する能力を高め、実践的な応用力を養うことが可能となるからである。その活動をまとめたものが本書であり、従って本書の目的は地域の活性化にある。

まず、内容に入る前に銀山街道について触れておく。銀山街道は時期によって使用されていた経路が異なるため、三つの時期に分けて説明

することができる。①十六世紀前半に使用された鞆ヶ浦道、②十六世紀後半に使用された温泉津沖泊道、③十七世紀以降に使用された大森―尾道間と大森―笠岡間である。このうち、世界遺産で登録された銀山街道は①と②である。これらは、銀鉱山と日本海側の港との間を結び、銀鉱石及び銀をはじめとする諸物資の輸送に利用された。神屋寿禎による銀山開発の開始以来、大内氏は鞆ヶ浦を銀の積み出し港とし①の鞆ヶ浦道を利用した。大内氏は邇摩郡（島根県大田市の一部）を分郡支配し、鞆ヶ浦付近を直轄領としていた。周辺地域は石見の小領主である温泉氏領や小笠原氏領であったため、直轄領で安全な鞆ヶ浦と鞆ヶ浦道を選んだとされている³⁾。しかしながら、大内氏の銀山支配は長くは続かず、尼子氏や小笠原氏との争奪を繰り返した末、永祿五（一五六二）年、安芸の毛利氏によって領有されることとなった。毛利氏は銀山支配にあたり温泉津港に目を付け、温泉津を直轄化した⁴⁾。その理由としては、銀の産出量の増大により鞆ヶ浦では手狭となったことが挙げられる⁵⁾。そのため、鞆ヶ浦港より規模の大きい温泉津沖泊港が利用されるようになり、②の温泉津沖泊道が整備された。

毛利氏は石見銀山を御料所として朝廷へ献上し、豊臣秀吉と共同で経営にあたった。その後、江戸幕府は国内の鉱山を直轄領とし、そこから採れる金銀をもとに統一貨幣を铸造した。石見銀は、大坂の御銀蔵まで送られ一旦収納されたのち、京都の銀座で丁銀に铸造された。石見銀山から大坂までの経路は、大森（大田市大森町）から尾道（広島県尾道市）まで陸路を通り、尾道からは瀬戸内海の航路をとった。この陸路が③の一つである。大森―九日市（島根県邑智郡美郷町）―三次（広島県三次市）―吉舎（同市吉舎町）―甲山（世羅郡世羅町甲山）―尾道という行

程である。もう一つは吉舎を過ぎて別ルートをとる、大森―(省略)―吉舎―上下(広島県府中市上下町)―高屋(岡山県井原市高屋町)―笠岡(笠岡市笠岡)である。この経路は年貢銀の輸送に利用されたという。なお、毛利氏時代に利用された大森から温泉津までの道も、山陰道に代わる幹線道路として利用され続けた。本書でとりあげる銀山街道はこの江戸期に利用された三つの経路である。従って、世界遺産に登録された銀山街道ではないことに注意する必要がある。

では、内容を見ていく。本書の構成は以下の通りである。
はじめに

第一部 基礎から知る銀山街道

銀山街道って知ってますか?、銀山街道マップ、道標って何?、銀山街道沿線の道標、井上厚史ゼミの紹介、市民団体のご紹介

第二部 銀山街道の歴史と最新情報

鳥根県(温泉津町・仁摩町・大森町・美郷町・飯南町)、広島県(三次市・世羅町・尾道市・府中市)、岡山県(井原市・笠岡市)

第三部 未解決の謎、参考文献一覧、協力者・制作に携わった学生
一覧

第三部はあとがきと本書の編集に関わる基本情報なので、実質的には二部構成である。よって、第一部と第二部について簡単な紹介を行う。

第一部では銀山街道の基礎的な情報をまとめ、調査者と調査協力者の紹介をしている。フィールドワークによって得られる道標の情報を基軸に説明を始めている点は、本書の調査方針を示しており導入として分かりやすい。調査者の紹介では、これまでのゼミの活動をまとめている。当ゼミは、鳥根県石見地方を中心とする中山間地域(都市や平地以外の

中間農業地域と山間農業地域)の活性化を研究テーマとしており、平成十六年度から活動を始め、平成十九年度より銀山街道の調査と周辺地域の活性化活動に取り組んでいるという。具体的な活動としては、関係する市民団体の集会の場を設け、活動成果の発表を行ったことがあげられる。このことにより、大学と市民団体間だけではなく団体間の交流を行うことに成功した。また、地域の百貨店と協力してイベントを企画・運営し、銀山街道地域の特産品などを一般市民に向けて紹介した。これらの活動内容は、当ゼミで創設した「銀山街道ネットワーク」というホームページに掲載され、広く情報発信がなされている。

また、市民団体や公共の施設・組織の紹介では、鳥根県大森町・同美郷町・同飯南町・広島県三次市・同安芸高田市・同世羅町・同尾道市・同府中市・岡山県井原市に拠点を持つ十二の団体・組織の活動内容と連絡先を掲載している。地域活性化の上で継続的な活動の中心となっているのはこれらの市民団体であり、その紹介は本書の目的の一つでもあるだろう。

次に、本編というべき第二部では、銀山街道の主要な地域をいくつかとりあげ、その地域の歴史や伝承、史跡、観光スポットなどの紹介を行っており、それぞれの地域の特性に応じた内容となっている。例えば鳥根県美郷町の紹介では、銀山街道の一部である「やなしお道」をとりあげ、歴史資料を引用しながら概要を述べたあと、寺社や史跡などについて写真とともに紹介している。さらに、周辺自治体と市民団体からなる実行委員会によって催された「銀の道ツアーウォーク」という観光PRイベントへの参加記録を載せている。観光PRイベントの体験記を掲載する意義は、銀山街道の紹介というよりイベントの紹介にある。銀山街道

沿いの地域の紹介であるため銀山に関係した歴史的事項が中心ではあるが、町の商店やB級グルメを紹介する記事もあり、各地域のまちづくり活動も伝えている。

本書が企画された平成十九年、石見銀山と周辺地域が世界遺産に登録され、あらゆるメディアによって宣伝されたことにより世間の注目を集めた。しかしながら、世界遺産に登録されなかった周辺地域にはどれほどの光が当てられただろうか。当然のことながら、歴史的な価値を有しているも、世界遺産の登録範囲に含まれない地域は生じる。本書でとりあげた銀山街道は、まさにその地域である。このような地域における観光客の獲得は喫緊の課題であり、自治体と市民団体の取り組みを支援した当ゼミの活動は評価に値する。

世界遺産へ登録されることの本質は、史跡とその歴史を未来へ残すための強力な保証を得ることである。それは他でもなく、現代まで保存してきた地域住民の不断の努力の賜物であり、それなしに登録に至ることとは言いづらい。しかし、世界遺産への登録は無条件に継続されるものではない。オマーンのアラビアオリックス保護区は、平成六（一九九四）年に世界自然遺産に登録されたが、その後密猟と環境悪化により生息数が激減したため登録から抹消された。登録後においても資産保護活動は継続されなければならないのである。そして、それら地域を国や自治体、大学、企業などが支援し、協力して活動に取り組むことが肝要である。

現在、国内の世界遺産暫定リストの記載物件は十三件である。これらの物件の周辺地域は、世界遺産への登録に向けて、また、登録後においても継続的な活動が求められるのである。

注

- (1) 村井章介「東アジア」と近世日本（歴史学研究会・日本史学研究会編『日本史講座5 近世の形成』、東京大学出版会、二〇〇四）、四一～四九頁。
- (2) 『温泉津町誌』上巻（温泉津町、一九九四）、五九五～六一五頁。
- (3) 佐伯徳哉「(1) 銀山開発から盛期における軻ヶ浦、温泉津・沖泊」（島根県教育委員会他編『石見銀山街道 軻ヶ浦・沖泊集落調査報告』、島根県教育委員会、二〇〇五）。
- (4) 『温泉津町誌』上巻、六三六～六七八頁。
- (5) 村井章介『海から見た戦国日本―列島史から世界史へ』（筑摩書房、一九九七）、一五一頁。
- (6) 道重哲男・相良英輔編『街道の日本史38 出雲と石見銀山街道』（吉川弘文館、二〇〇五）、一七～二七頁。
- (7) 「銀山街道ネットワーク」ホームページアドレス
<http://rds.v.u-shimane.ac.jp/zemi/ainoue/ginzankaido/index.html>